

3.11・10年を前に福島再論への公開論議の試行と若干の知見

A Trial of Open Discussion on the Reconsideration of Fukushima Affairs
and Recognition of Several Reactions Facing to the 10 Years from 3.11

*渡邊一男¹ (¹WNR-Cx 渡邊研究処)

福島問題への理解を3.11に至る過程での核科学技術進展の歴史的国際的基本事項につき現場への影響と対応を重点に周辺の関連技術者につき試みたところこれまで期待とは若干相違する状況がみられ報告する。

キーワード: 福島再論、爆発抑止、アイク-3.11、歴史的・国際的理解、国際的視点、広範論議

1. 緒言

福島問題を原爆被爆からアイク国連演説（1953）ケネディ・シーボーク報告（1962）を経て福一に至る経緯について、歴史的・国際的事実より包括的・明確に次世代に伝えることが“3.11”10年を機に意義ありとして、このほど「福島再論」を公益事業運転管理技術者の視点より技術誌に投じ¹⁾、賛否の論²⁾があった。

表1. 福島再論にむけての覚書・要点

- ・公益事業運転管理技術者の視点
- ・福島爆発抑止の可能性の追求
- ・「atomic」と「nuclear」の異同への理解
- ・原爆被爆責任 - 沖縄・広島・長崎トリニティ会議
- ・民生用核発電 - 1962年ケネディ・シーボーク報告
- ・福島爆発の淵源的素因ジャパカルチャー
- ・「Safety Culture」と「安全文化」との異同
- ・システムカルチャーの要諦は「複線報告」の許容
- ・Radiation Protection Cultureに虚偽隠蔽の危機
- ・1996年・姉ヶ崎火力発電所 60万kW爆発への認識
- ・2002年・シュラウド問題で「愛社精神」が戦陣訓に
- ・12兆アセット（有利子負債）が福島問題の根源

表2. 核発等発電所爆発事故原因への理解
公益事業運転管理技術者の視点

爆発を生じた発電所	爆発事故発生への素因
スリーマイル島 NPP 1979・死亡ナシ	・B&W 社安全設計の不備 ・税制に早期運転の誘導 ・NRC 安全規制方針の不適
チェルノブイリ NPP 1986・死亡 33 名	・ブレジネフ体制下の規律弛緩 ・試験計画の杜撰
姉ヶ崎火力発電所 1996・死亡 2 名	・天然ガス燃焼技術の未熟 ・自動制御特性への理解不十分 ・試験計画の検討不足
福島第一原子力発電所 2011・死亡ナシ	・ジャパカルチャー ・12兆円アセット（有利子負債）

2. 「福島再論」報告の趣旨

報告の要点を表1に、またTMIほかの爆発事故についての現場的視点よりの素因を探り表2に示す。

筆者は1951年より実務に従事し、1992年厚生省在郷軍人病（レジオネラ症）予防基準作成研究主査、同米空調学会基準作成参画³⁾等あり、2008年以降核発関連空調学会報告12件、2012年以降原子力学会関連報告25件があり、それらの知見をベースに「再論」（pp. 19）を記しており、本年春の年会・福島大報告「1962年ケネディ・シーボーク報告」の福一1号機への影響⁴⁾は一挿話であり、特に重視する事項は「福島爆発抑止」との戦略的発想の喚起である。

3. 「福島再論」報告への関連論議

応答としては、「従来に全く見ない論旨であり目を覚まされた思い」（元電力役員）との好意的評価から、反原発の姿勢がないとの批判的意見（元原発メーカー）、これに付度の評（元エネルギー企業）、編集方針への疑問（文系・一般技術者）と多様であった。全般的状況には、①「爆発抑止」の視点は現場技術者として最重要と再論の初段に記したが反原発側からは不可能として積極的意見がみられず意外

の状況であった。②「歴史的国際的視点」を多く例示したが殆ど積極的興味が示されず民主主義教育での歴史軽視の弊と感じられた。③「現場的視点」を強調したが納得的意見が示されず小市民的傾向に流れていた。

4. 結言

「福島爆発」より10年を経て関連技術者の意識にも固定化の弊が顕著でありこれでは次世代への責務に支障ありとまず認められた。即ち、①「学会事故調報告」を始点としてアイク演説以降の歴史的国際的推移を組織的包括的に論議し、②次世代を同列とし要求・期待に応えるものとして協議し示すことが肝要である。

参考文献

- [1] 渡邊一男, 運転管理技術者の視点による福島核発爆発の淵源的素因 - 福島再論にむけての覚書, 技術史研究, 2020
- [2] 後藤政志, 福島事故に関する技術課題と原発の設計上の矛盾 - 渡邊一男氏の論文「運転管理技術者の視点による福島核発爆発の淵源的素因」に対する批判的意見一, 技術史研究, 2020
- [3] Minimizing the Risk of Legionellosis Associated with Building Water Systems, ASHRAE, 2000
- [4] 渡邊一男, 杉山勝行, 福島問題への核発初期米大統領施策の影響についての考察, 原子力学会 2020年春の年会

*Kazuo Watanabe¹ (¹WNR-Cx Watanabe Lab.)